



人間らしい死を 迎えるために

柴生田 晴四
(経済倶楽部理事長)

▼生きているものに、いつか死が訪れるのは、避けることのできない運命です。死すべきものとして、人間はその運命をたじろぐことなく引き受けなくてはならないのではないのでしょうか。生にしがみつくとなく、死を受け入れるためにこそ、人はより良い生を全うしなければならぬのです。人間らしく生きただけでなく、いかにすれば人間らしく死ぬことができるのかを、高齢化が進む日本の社会

は、もつと真剣に考えなければならぬ時代を迎えています。そのためには死を自らのものとして考え、自らの意志で全うする覚悟が求められています。

▼終末期の医療だけではありません。「健康」という錦の御旗の下で、われわれはあまりに検査の基準値に支配され、生き方まで左右されてはいないでしょうか。血圧やコレステロール、あるいは腹囲の基準値を超えているからといって、医師に指示されるがままに、安易に薬を服用することが、果たして本当に健康なのでしょうか。

▼近代医学の発達はずさまじいものがあります。かつては当然死ななければならなかった命が救われるようになりました。特に生きる

べき未来が突然の事故や病で断ち切られる青年の場合には、医学の進歩は大いなる福音として歓迎すべきものです。しかし、すでに十分に生きてきて、余生を楽しむ時期に入った世代にとっては、若い世代とは違った医療との向き合い方があるはずです。一日でも長く生きていたいと願うよりも、少しでも人間らしく生きるためにこそ、医学の進歩を使うべきではないでしょうか。

▼医療費の増大が国家財政の悪化の大きな要因となり、国民皆保険の存立が危ぶまれるようになってきます。このことを高齢化社会の到来に起因すると、一言で片づけてしまうのは、あまりに医療保険財政の現実を知らない世迷言です。健保財政を圧迫している最大の

原因の一つは、避けられない死を延命するために、一日数百万円もの高額医療費が投入されているからです。私自身は、こうした医療を断固拒否したいと考えています。

▼日本人は医療行為のすべてを医師に任せすぎていないでしょうか。自分の命のありようを専門家にすべてゆだねるのではなく、自ら考えて対処する覚悟を持つことが、自立した市民の責任ではないでしょうか。

訪れる死は、その人がどう生きてきたかの結果でもあります。自分を生かしてくれた社会のために、そして若い世代や残される家族のために、自らがどのような死を選ぶのか。その選択は死にゆくものの責任ではないのでしょうか。